

# インド 姿を消す娘たちを探して

「今、500ルピーを払いた寒村は男ばかりで、嬖いなさい。後で5万ルピーを蓄えなさい」といっこのは、胎児の性別判定検査をする病院の広告で、インドの人々に「びったりくる」と評判だった。女の子の胎児を取り除くのに500ルピー払えば、後にダウリー（結婚で新婦側から新郎の家族におくる金品）として支払わなければならない5万ルピーを蓄えることができるという意味である。男は価値があるが、女は金がかかる厄介者にすぎないという根深い女性差別を表す。胎児検査は妊娠14〜18週に行われ、20週まで中絶が許される（1972年合法化）。中絶された96%が女児だった（1985年ボンベイ調査P99）という。インドの人口は今12億人を越えているが、男女のバランスはますます不自然になっていく。インドは極端に息子好きの国。男の子だけが生き残り、娘が抹消されている。日本にも「間引き」という女児殺しが民謡などにも残っている。間引きを繰り返

れた女性たち ("missing women") といふ言葉

を作り出した。1980年代までは女児たちは、通常生まれた後に殺された。新生児の殺人は産婆にとって辛い。インタビューで産婆がいう。「枕や布で窒息させるんです。ああ、恐ろしい光景です。小さい子が私のサリーの下で、生きようともがくんです」それから静かになります。ああ、何度見たことか(P32)。

第4章、科学的な除去では、胎児の性別確認に羊水検査をし、その後女児を中絶する。1980年代終わりにはこの方法が定着した(P104)。そして2005年には男女判

した寒村は男ばかりで、嬖捨山へ行く老女が青年の相手をしたり、長男の嫁は全ての兄弟共有だという噂もあつた。

さてインドの話。そんなインドで、身の毛がよだつ女児の新生児殺しが起きていると本書は伝える。生まれから娘を殺す犯罪は、近年子宮にいる娘を殺

受けた女性はいないかというところ、そうではない。教育レベルの高い女性は更に高いレベルの男性と結婚しようとするので、ダウリーは高くなる。花婿側は立派な結婚式、家、車といった要

## インドの根深い女性差別

### 身の毛がよだつ女児の新生児殺し

金谷 千慧子

すという方法に取って代わった。静かで穏やかに行われている。インドのある地域ではほとんど二世代の女性に絶滅しているという。

第1章、姿を消す娘たちを探して、ではインドのノベル経済学者アマルティール・センの発言を紹介してア・センの発言を紹介して

いる。「アジア・アフリカなど、世界で1億人以上の女児がいなくなっているが、その多くがインドの女児である」と(P71)。彼は「失われた女性たち



四六判・258頁・2310円  
柘植書房新社  
978-4-8068-0635-6

の性を高度先端技術で選択できます」という広告が出た。これは高額な治療費が払える層に広がっている。女児を抹消するのは教育を

求を娘の家に出す。ダウリーそのものが女性の男性への隷属であり、全ての日常生活は男性の支配に基づき、女性は男性の財産であり、女性は独立して何一つできない不要なものである。だから望まない女児を子宮から取り除くのを悪いとも何とも思わない思考停止に陥っているのだ。

ド、ケーララ州に存在したサンバンダ婚(妻問い婚)の研究が紹介されており、興味深い。ここではダウリーなどなく、夫は妻と永久には一緒に暮らさず、時々妻を訪れる。子どもたちは母親と暮らす。家族の財産は全部女性に分け与えられる。母系制は娘が重要である。ベールも被らなかつたし、教育を受けるために家を出した仕事もした。男女の人口的な不自然さもなきなヒントがこの章にある。

私は昨年、念願だった北インドへ行った。20年ぶりのニューデリーは騒音と埃と大声で息苦しいほどだった。インドは人口だけではなく、やがて経済力も中国を引き離すかと注目されている。IT関連では女性の雇用もすんでおり、カーブストさえも乗り越えそうだという話も聞いた。インド

では、初の女性大統領パティル氏が登場(2007年〜2012年)、国会議員のクォータ制(3分の1を女性に)も決まっている。インドで決定権を持つ立場にいる女性の数は日本よりはるかに多い。しかし「500ルピーで中絶」の話も聞いた。

鳥居千代香さんの本は、出版されるたびに反響を呼ぶ。訳本とは思えない迫力で迫ってくる。私はそのたびに「鳥居千代香さんの本」を贈り物にする。男性にも女性にも読んでほしい。本書はもしかしたら、女児が絶滅させられていることへの解決策を探す助けになるかもしれない。著者も訳者も書評を書かせて頂いた私もそう思って、読者に呼びかける。(鳥居千代香訳、かなたに・ちえこ氏PNPO法人女性と仕事研究所代表)

★ギーター・アラヴァムダンとは女性記者が少ない時代にジャーナリストとして「ヒンダスターン・タイムズ」の記者として仕事を始めた。インドで有名な雑誌に広い領域にわたり記事を執筆。二〇〇七年に出版した本書の英語版はベストセラーに。